

“ボランティア”と呼ばない関係づくり

2017-2026

図書館と市民による
プロジェクトの10年

はじめに

あかし市民図書館（以下市民図書館）は2017年１月に開館しました。JR明石駅前という立地もあり、年間およそ80万人が訪れています。

図書館は本を読む・本を借りる場や自習をする場であると同時に、本と市民とをつなぐ場であり、市民がいきいきと活動する場でもあります。また、子育てを支える場であり、世代や立場を超えて多くの人が利用できる、地域の文化的な情報・交流拠点でもあります。市民図書館では、明石の文化情報の中心的な存在となることを目指し、現在もさまざまな取り組みを続けています。

本書では、明石市立図書館が、まちの人々とどのように関わり、何を大切にしながら歩んできたのかを、「Dチーム」と呼ばれる市民との協働の取り組みを軸に振り返ります。Dチームの活動は、図書館と市民が共に考え、試行錯誤を重ねながら形づくってきたものです。本書は、その過程をまとめたひとつの記録でもあります。

ここに紹介する取り組みは、決して完成されたモデルではありません。うまくいったこともあれば、迷い、立ち止まったこともありました。それでも、市民とともに歩む図書館とはどのような存在なのか、地域を豊かにする公共文化施設とは何を目指すのかを考え続けてきました。

本書が、市民とともにある図書館の姿や、これからの公共文化施設のあり方について、読み手の皆さんと考え、対話を深めていくための小さな手がかりとなれば幸いです。

目次

Dチームと図書館の挑戦

・・・・・・・・・・・・・・・・

SIDE A　Dチームメンバー
0.「市民による夢の図書館プロジェクト」
**　略してDチームです**
1. 館外イベントの企画と運営に挑戦しました
2. Dチームフェスタの記録
3. 活動（グループ）の紹介
4. 日々の活動で心がけていること
5. Dチームから図書館へ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

SIDE B　図書館スタッフ

0. 図書館のなかで何が起きていたか
1. ボランティアとよばないで
2. ボランティアと何がちがうの？
3. コロナ禍でどうする！？
4. ファシリテーターとDチームと未来の当たり前
5. Dチーム、正直わかりにくいです

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私たちの未来、Dチームのこれから

Dチームのあゆみ

（資料）活動ガイドライン・運営要項

謝辞・奥付

Dチームと図書館の挑戦

由井清美/あかし市民図書館 館長

明石市立図書館（あかし市民図書館・明石市立西部図書館）は、2018年に『図書館からはじまる“あかし暮らし”』と題したビジョンブックを刊行しました。同書は、「本のまち明石」に向かって歩みを進める図書館のチャレンジとビジョンを示すことを目的としたものでした。それから8年が経過し、当館の事業は、当時想定していた以上に広がりを見せているように感じています。

駅前への移転開館以降、当館では、図書館に集まる人々の間に新しいつながりを生み出し、新たなコミュニティを育むことを目指した取り組みを続けてきました。その中核となっているのが、「市民による夢の図書館プロジェクト（Dチーム）」です。本プロジェクトは、2017年に始動した、図書館と市民とのパートナーシップの試みです。

旧館時代のボランティア制度を振り返る中で、私たちは、図書館と市民が一方的な支援関係にとどまるのではなく、共に話し合い、行動し、省察し、次の計画へとつなげていく活動のサイクルを大切にしたいと考えました。現在では、職員でもなく、単なる来館者でもないプロジェクトメンバーが、日々館内でそれぞれの活動を担っています。

近年、新たに開館する図書館や文化施設では、「市民とのパートナーシップ」や「地域連携・協働」という言葉を耳にする機会が増えています。もし今後、他の図書館でも市民との協働を考える場面が増えていくのであれば、まもなく活動10年目を迎えようとするDチームの基本的な考え方や、これまで模索してきた活動の枠組みが、何らかの参考になるのではないか。そのように考え、本書を刊行することにしました。本書では、プロジェクトに関わってきたメンバーと図書館スタッフ、それぞれの立場からの率直な声をお伝えします。

2025年4月には明石市立二見図書館が開館しました。「ふたみん」の愛称でスタートしたこの図書館でも、新たなパートナーシップの仕組みとして「ふたみん応援団」「ふたみん使ってみいひん？プロジェクト」が動き始めています。また明石市には、図書館以外にも「ブックスポット」と呼ばれる、本のある場所が数多くあり、それぞれの場で個性的な活動が展開されています。

私たちは、その時々、その場所で、今できることを模索しながら、市民と力を合わせ、図書館と地域がともに育っていくことを大切にしたいと考えています。そして、図書館がより多くの方にとって身近な存在となるよう、その役割や可能性を伝え続けていきたいと思います。図書館は、誰もが立ち寄ることのできる知の広場なのです。身近なところにたくさんの「本」があるまち、明石市へ、ぜひお越しください。

2026年6月



SIDE A　Dチームメンバー

0.「市民による夢の図書館プロジェクト」略してDチームです

市民による夢の図書館プロジェクト（以下Dチーム）は、明石市立図書館（あかし市民図書館および明石市立西部図書館）の取り組みに共感し、図書館とともに活動を進めていこうとする意志をもつ人々によって構成されています。Dチームは「図書館の仕事を助ける」ことを目的とした集まりではありません。図書館を舞台に、自分自身が学び、楽しみながら活動することを通して、「市民のための図書館の実現」を目指し、さらに「明石のまちと人を元気にする」ことを大切にしています。そうした思いを共有しながら、市民と図書館がともに歩むプロジェクトです。

1. 館外イベントの企画と運営に挑戦しました

現在、Dチームには小学生から80歳代まで、さまざまな年代のメンバーが集い、それぞれのペースで活動しています。2026年6月現在、登録メンバー数は200人近くおり、活動するグループは32団体です。図書館の中では毎日のようにいずれかのチームによるイベントやミーティングが開かれています。

プロジェクトを開始した2017年から登録して活動するメンバーもいれば、途中で一区切りをつけたメンバーもいます。活動を終えたグループや、独立して新たな歩みを始めたグループもあり、関わる人の顔ぶれは少しずつ変化してきました。
そうした変化を重ねながら、小さく始まったこのプロジェクトは、ゆるやかに、しかし確実に広がりを見せてきました。そして2025年12月、有志のメンバーによって大規模なイベントが企画・実施されることになりました。

当日は、ステージ企画やワークショップ、音楽ライブ、読み聞かせ、ストーリーテリングなど、多彩なプログラムが館内外で展開され、一日を通して多くの人が集い、楽しむ場となりました。

それでは、当日の活動の記録をご紹介しましょう。



2. Dチームフェスタの記録
















リースストラップ作り
バイオニアチーム
ワークショップ















絵本とお話の会
『たんぽぽ』
1. 音楽とともに絵本を
2. ストーリーテリング
(絵のない絵本)




CAFÉdeCRI




STAFF


人形作り
STAFF


プロジェクト






Scottie
flowers




20




McDonald's

明石市立図書館
2025年12月24日 ·

【市民】【報告】
12月6日（土）、市民による夢の図書館プロジェクトメンバー(Dチーム）が合同で行う、一日限りのお祭り「Dチームフェスタ2025」を、パピオスあかし2階のあかし市民広場とあかし市民図書館の2か所の会場で同時開催しました。

2会場でのべ約580名ものお客様に来場いただいたこのイベント。今回が初の開催となりました。

どんな出し物があったのかというと？

あかし市民広場の会場には、クリスマスリースの形をしたストラップ作りのコーナーや、サンタさんを折り紙で作るコーナーなど、その場で作って持って帰ることができる工作ブースが出現。
ステージ上では読み聞かせやリコーダーコンサート、キター演奏＆トーク、クイズコーナーなどお楽しみ企画がにぎやかに繰り広げられました。
市内3つの図書館（あかし市民図書館・西部図書館・二見図書館）の館長がステージに登場し、自分の館の特色を語る時間も。
インタビューコーナーでは、Dチームの各団体さんたちからもお話を伺いました。

4階のあかし市民図書館の会場では、子ども向けのおはなし会や大人向けの朗読会、短歌カードゲームのイベントなどが行われました。

どの企画も、Dチームのそれぞれの団体さんの持ち味や魅力が詰まった内容で、大人もこども、家族で来られた方も、いろんな方々に楽しんでいただけるフェスになりました。

遊びに来てくださったみなさま、ありがとうございました！

#明石市立図書館 #あかし市民図書館 #西部図書館 #二見図書館 #akashi #library #Dチームフェスタ #図書館イベント



明石市立図書館facebook投稿より

2階（市民広場）・4階（図書館）いろんなところで、いろいろ開催 !!

市民による夢の図書館プロジェクト

あかし市民図書館
Project

Dチーム フェスタ 2025

12月6日（土） 参加無料

10:30～15:30

メイン会場　2階 あかし市民広場

分会場　4階 あかし市民図書館（研修室・児童書エリア）

Time Table

in 2階 市民広場

ステージ

- 12:00 開会宣言
- 12:30 トーク＆ライブ（ギター）（NPO法人鉄補者集団 ACT135 明石）
- 13:00 インタビューコーナー①
- 13:30 おはなし会（まくちゃん・こっちゃん親子）
- 14:00 インタビューコーナー②
- 14:30 リコーダーコンサート（アンサンブル Nami）
- 15:00 テクノクイズ（NPO法人鉄補者集団 ACT135 明石）
- 15:30 終了

フロア

- 12:15 工作と折り紙（ボランティアでつくり）
- スティック人形作り（NPO法人明石おおやど劇場）
- リースストラップ作り（バイオニアチーム）
- 15:00 終了

in 4階 図書館

研修室

- 10:30 短歌カードゲームで遊ぼう＆短歌を作ってみよう（abc あかし BOOK 倶楽部）
- 12:00
- 13:20 大人のためのおはなし会（友貴町第107）
- 14:10
- 14:30 大型絵本読み聞かせ（星の会 緑）
- 15:20 終了

児童書エリア

- 11:00 どようのえほんの会（ひよこの会）
- 11:30
- 13:20 クリスマスおはなし会（ひよこの会）
- 13:50
- 14:00 紙芝居＆絵本読み聞かせ（おはなしグランマ）
- 14:30 おはなし会（明石市立図書館おはなしの会）
- 15:00 おはなし会（明石市立図書館おはなしの会）

12:00～15:30

図書館ブース

ゲームコーナー「としょかんからのちょうせんじょう」

Dチームとは…

市民による夢の図書館プロジェクト（D=Dream）の愛称です。図書館と市民が協働し、本と図書館と市民をつなぐことを目指す市民グループの集まりです。活動歴の長い人も新しい人もいて、多種多様なメンバー構成です。これまでの経験や得意なことを活かし、新たな企画を立ち上げることもできますし、すでに活動中のグループに参加することもできます。

あかし市民図書館

3. 活動（グループ）紹介

あかし市民図書館では、年間に467回のイベントが実施されており（2024年度実績）、明石市立西部図書館の取り組みも含めると、その数は年間600件を優に超えます。Dチームが担当しているのはその一部ですが、メンバー一人ひとりの個性や「やってみたい」という思いを軸に、日々さまざまな活動が展開されています。

活動内容は、おはなし会や朗読、紙芝居、絵本を通じた親子向けの取り組みから、大人向けの読書会やアート鑑賞、手仕事、技術や文化をテーマにした講座まで多岐にわたります。また、返本（書架に返却本を戻す作業）・書架の整理・本の修理など、図書館の日常を支える活動も含まれています。

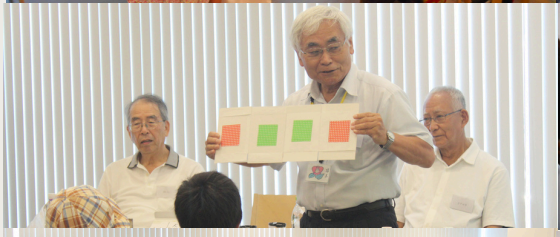
どのような活動があるのか次ページに一覧を挙げます。最初に活動名を、続いて括弧内にグループの名称を表記しています。活動の形や関わり方はグループごとに異なりますが、いずれも「図書館を舞台に、学びや楽しさを共有する」というDチームの考え方を大切にしています。

一覧表を眺めながら、「こんな関わり方もあるのだな」「自分だったらどんな活動をしてみたいだろうか」など、ぜひご自身が図書館で活動する姿を思い描いてみてください。












70




あかし市民図書館

1. あかしなお茶会（あかしなお茶会）
2. 絵本とおはなしの会“たんぽぽ”（絵本とおはなしの会“たんぽぽ”）
3. 英語絵本読み聞かせ（はぴごら）
4. お仕事帰りのアート鑑賞（アートナビゲーターTetoMeto）
5. 大人のための絵本セラピー（ふうせん畑）
6. おとなのためのおはなし会（友愛朗読107）
7. 大人のためのストーリーテリング（明石市立図書館おはなしの会）
8. 大人のための朗読会（朗読ぐるーぷ「いつか」）
9. 大人のための朗読劇（笙の会 あ組）
10. おはなし会（明石市立図書館おはなしの会）
11. おはなしの研修会（明石市立図書館おはなしの会）
12. おはなしひろば（NPO法人明石おやこ劇場）
13. おりがみと絵本（ボランティアてづくり）
14. かみしばい＆読み聞かせ（絵本ばたけ）
15. きくちゃん・こっちゃん親子のたのしい読みきかせ（きくちゃん・こっちゃん）
16. 技術よもやま話（NPO法人技術者集団ACT135明石）
17. 切手あそび（神戸郵趣会）
18. 心ときめく絵本の世界へ（絵本を楽しむ会）
19. たこ文庫であそぼう！（パイオニアチーム）
20. デザインコマを作ろう！（デザインコマを作ろう！）
21. どようのえほんの会（ひよこの会）
22. にこにこ・かみしばい（おはなしグランマ）
23. 人形劇（絵本楽しみ隊フルーツパフェ）
24. 返本/書架整理（おてつだいチーム）
25. ボイス大人のための朗読会（コープ朗読ボランティアサークル ボイス）
26. Pot-pourri みんなの朗読会（朗読ユニットポプリ）
27. 本の修理屋さん（本の修理屋さん）
28. 名作を読破するための読書会（acbあかしBOOK倶楽部）
29. リコーダーミニコンサート（あんさんぶるNami）
30. 朗読会（声のかけ橋）
31. 朗読にあこがれて（朗読にあこがれて）
32. 朗読のひととき（朗読グループ「えん」）

明石市立西部図書館

33. どようのえほんの会（はとの会）
34. おはなし会（はとの会）
35. おやこでえほん（はとの会）
36. 山岡朗読会（山岡朗読会）

4. 日々の活動で心がけていること

Dチームには、さまざまな関わり方をしているメンバーがいます。
毎週のように活動している人もいれば、月に一度だけ顔を出す人もいます。ひとつの活動を長く続ける人もいれば、複数の活動を行き来しながら関わる人もいます。

ここからは、そんなDチームメンバーの声をお届けします。
ある日の活動中、図書館スタッフがメンバーに声をかけ、活動を始めたきっかけや、普段心がけていること、やりがいについて尋ねてみました。すると、それぞれに個性のある答えが返ってきました。それは“それぞれの関わり方”が見えてくるような声でした。

定期的な活動に向け緊張感を持って運営しているグループもあれば、同じく定期開催でもマイペースに楽しみながら続けているグループもあります。自分にあったペースや人との関わり方、楽しみ方を心得て活動する様子が伝わってきました。

そしてどのメンバーにとっても、来館者の笑顔や楽しむ姿が、大きな励みになっているようです。

メンバーAさん
Q1｜Dチームに参加したきっかけと時期は？
2023年から。コロナ禍により、子どもを対象とした行事・活動拠点が少なくなった
Q2｜活動での楽しみや工夫していること
参加されている子どもたちの、それぞれ個人の個性や特徴に応じた内容や作業速度で取り組んでいる
Q3｜印象に残っている活動や出来事は？
子どもたちの生き生きとした取り組み方、および作品が完成した時の喜びを直に感じることができた。また迎えに来られた保護者の方に、嬉しそうに成果を見せている様子を見て、こちらも嬉しくなる
Q4｜これからやってみたいこと
これまで実施してきた講演シリーズを継続したい

メンバーBさん
Q1｜Dチームに参加したきっかけは？
2017年から、
Dチームの存在を知りワークショップに参加したことから
Q2｜活動での楽しみや工夫していること
初めての方でも気軽に来ていただけるような雰囲気作り
Q3｜印象に残っている活動や出来事は？
毎回来てくださる方がいたり、久しぶりにいい時間でしたと言ってくださったりしたとき
Q4｜これからやってみたいこと
今の活動を継続したい

メンバーCさん
Q1｜Dチームに参加したきっかけは？
2023年から、以前から同じ様な活動をしていたので
Q2｜活動での楽しみや工夫していること
絵本に出てくる物を折り紙プレゼントとして用意し飾って雰囲気づくりをするよう工夫しています
Q3｜印象に残っている活動や出来事は？
参加していただいた方の喜ぶ顔、他の団体と意見交換やコラボできる事
Q4｜これからやってみたいこと
図書館の方と相談や意見交換がしたい

メンバーDさん
Q1｜Dチームに参加したきっかけは？
2017年から、
新しい図書館ができてここで書架整理をしたいと思っていたから
Q2｜活動での楽しみや工夫していること
日課のような感じで、気楽に活動している
メンバーは複数名いるが、つかず離れず、マイペースに活動している
休みたいときに休むし、活動の目的が皆一緒なので気を使わなくてよい
作業に熱中するとつい声が大きくなるので気をつけている
Q3｜印象に残っている活動や出来事は？
利用者が探していた本をみつけてあげられたときはいつも嬉しい
Q4｜これからやってみたいこと（あれば）
いつもどおり、このペースで続けたい
予約された本を本棚から探すことにも挑戦してみたい



5. Dチームから図書館へ

つづいて、メンバーから寄せられた図書館へのメッセージをご紹介します。先に紹介したDチームフェスタに参加した各グループの代表者に、あらためてDチームと図書館について思うことを書いていただきました。

「旧館から新館へ」

髙橋博子、金谷奈津美
/明石市立図書館おはなしの会

私たちのグループは明石市立図書館（旧館）開館の1年後の1975年に「おはなしの会」として発足、50年間活動を続けてきました。子どもたちに向けてのおはなし会は、1980年からは月2回になって今に続いています。また、子どもたちにどんなおはなしや絵本を手渡すかを毎月1回のメンバー研修会として続けています。旧館の頃は図書館スタッフの方も加わってくださり共に学び合えました。新館移転を機に既存のグループだけでなく図書館で何かやってみたいという人たちが集まってワークショップが行われました。

さまざまな意見交換、試行がなされて、図書館が「まち」の核となって開かれた空間として活動していこうというエネルギーが感じられました。Dチームのイベントや他のグループのみなさんとの交流を通してさまざまな思い、考え、活動を知り、＜夢＞を実現へと導くプロジェクトだと実感しています。

「おはなしの会」の活動としては旧館からの延長ですが、Dチームとしての約束事が整ってきて、会場設営や進行など図書館スタッフの方々との役割分担もスムーズにいくようになりました。「大人のためのストーリーテリング」の年１回の定例開催や、長期休み毎の「どなたでもどうぞおはなし会」も定着してきて、いろいろやってみようというDチームの考え方が実践できているように思います。

今後も「ストーリーテリングを通して子どもたちに良き本を手渡したい」という思いを芯に据えながら活動を続けていきたいと思います。

「まちの中心にある図書館への期待」

佐伯理恵/NPO法人明石おやこ劇場

本のまち明石の中心にあるあかし市民図書館に、私たち「明石おやこ劇場」は、これから益々発展していかれることに大いに期待を寄せております。特に子ども達の心の育ち　文化の発展に一層の役割を果たされる！果たしてほしい！と感じております。

明石おやこ劇場は約50年の歴史があり文化に触れる舞台鑑賞や音楽鑑賞・子ども達の心育む体験活動・幼児への親子遊びの提供と3本柱で活動を続けております。おやこ劇場の先人たちが繋いできてくれた知恵と私たちがさまざまなプロの方々との出会いや経験で学んだことが沢山あります。今、特に『心』、感動したり喜怒哀楽を感じたり他者を思いやったりする気持ちを持つことがとても大切ではないかと感じています。そしてそれを言葉にする。まずは子どもも大人も一緒に心ワクワク楽しめるような場の提供を…それがDチームで活動させていただくことで実現出来ると考えます。研修室の活用に市民広場でのイベント開催。思いを形に出来る『場』、誰もが参加できる『場』があることは何より大事です。そうした私たちの思いを発信、実現することが出来るDチームの存在は大きいです。また、他分野多方面でご活躍されている前向きな方々の集まりであるDチームは他にはありません。

文化の継承や創造に、図書館の専門的な知識と、多くの方々が所属するDチームの活動の力とが融合することで、とてつもなく大きな力になり市民の皆様に影響を与えられるはず。今後も大きな可能性を秘めたあかし市民図書館およびDチームです。

「図書館をより利用してもらうために」

松谷淳子/ボランティアてづくり

人の集まる図書館で、私達のグループがイベントをして、来館者に参加してもらい、グループ活動を知ってもらう事で、経験を積み重ねることができ、グループの向上に大変プラスになっています。また、私達が活動することで、イベント参加者の増加、図書館やDチームの認知度の向上につながり、図書館の利用者がさらに増えればと思っています。

Dチームの一員として、他のチームの活動も気になります。インスタグラムで図書館イベントの情報を共有することができるようになりました。私たちの活動も他のチームにも解りやすくなりますし、私たちにとっても他のチームの活動を知ることは刺激になります。

最後に、今図書館は本を読む借りるだけでなく、情報収集やコミュニティの場として求められていると思います。

Dチームが活動する事で、この一面が広がります。そしてまた、インスタグラムなどのSNSを通して活動を紹介する事で、広くDチームの活動を発信することができ、新しい仲間、新しい活動の場として図書館の利用者が増えれば良いと思っています。

「学生メンバーとして活動してみて」

澁谷美月/絵本とお話の会「たんぽぽ」

私たちは、小さな子どもたちに向けて読み聞かせや紙芝居、折り紙の活動を行っています。活動を始めたころは、「ボランティアとして何かをしてあげる」という気持ちがありました。しかし、子どもたちと関わる中で、その気持ちは少しずつ変わっていきました。子どもたちは私をお手伝いに来た人としてではなく、一緒に笑い、一緒に楽しむ仲間として受け入れてくれました。その姿を見て、この時間は一方的に支えるものではなく、お互いに影響し合う時間なのだと感じました。

読み聞かせのときに目を輝かせてくれる姿や、折り紙が完成して嬉しそうに見せてくれる表情は、私の心を温かくしてくれます。一方で、うまく気持ちが伝わらなかったときは、自分の関わり方を見直すきっかけにもなります。保育士を目指している私にとって、この経験はただの体験ではありません。子ども一人ひとりの性格や気持ちを考え、その子に合った声かけを工夫することは、大切な学びです。そして、子どもたちと心が通じたと感じる瞬間は、何よりも嬉しい時間です。

私は、この活動には支える人と支えられる人という区別はないと感じています。子どもたちとの出会いを通して、人と人がつながることの温かさと関係を築くことの大切さを学んでいます。

澁谷千尋/絵本とお話の会「たんぽぽ」

私は普段、小さな子どもと関わる機会がほとんどないので、このボランティアはとても貴重な経験になっています。子どもたちと直接ふれあえる時間は新鮮で、自分自身も成長できていると毎回感じます。読み聞かせをしていると、子どもたちが絵本に夢中になってくれる姿を見るたびに、大きなやりがいを感じます。ページをめくる瞬間に目を輝かせたり、楽しそうに笑ったりする様子を見ていると、私まで温かい気持ちになります。

一緒に活動している先生方の読み方はとても優しく、包み込むような雰囲気があり、すごいなと思います。

私は中学生の頃から月に一回、この活動に参加しています。続けてきたからこそ少しずつ自信もつきましたし、地域に貢献できていることを嬉しく思っています。これからもこの活動を大切にしながら、さらに成長していきたいです。

「新しいことにチャレンジする楽しみ」

木原明美/パイオニアチーム、あかしなお茶会

あかし市民図書館がオープンした時、何か新しいことができるのではないかと、ワクワクしていました。期待通り、図書館で活動する人材の募集があり、自分たちの「やりたい！」を実現する最初の一歩がはじまりました。

集まったメンバーの中には、図書館ならではの活動をしたい人や新たなことをしたい人などさまざまでしたが、私は、人と本をつなぐ楽しいこと、面白いことをしていきたいと考えていたのでイベントを企画していく「パイオニアチーム」に入りました。

まず、自分たちが楽しむ事を第一に考えてチームメンバーの得意分野を活かした企画として「指ヨガ」「夏の夜のこわーいおはなし会」「コラージュでカレンダーづくり」「たこ文庫であそぼう！」などを開催しています。

また、年2回の開催されるDチームのワークショップにおいて他のグループの人たちとの交流をすることでグループの垣根を越えた新たなイベントへとつながり、物語の中のお茶会が実現しました。このように、主体的に活動していくこと、きっかけを後押しする図書館側との協働関係が小さな種に芽吹きを促す化学反応を起こしている面白さを日々感じています。これからどのような掛け合わせができ、化学反応が起きるのかワクワクしながら、次はどんな事をやろうかと、思いをめぐらせています。

「図書館での活動について」

友久誠司/NPO法人技術者集団ACT135明石

本NPO法人は、工学分野の技術者で組織されており、2006年の発足以来、企業・公営団体・学校等の課題解決を中心に活動してきました。

2023年にDチームに参加させていただき、ここでの目的・活動は以下の2点です。

ひとつは、一般の方を対象に、地域に根ざした活動を展開することで、「技術よもやま話シリーズ」の講演です。これまでのテーマは、「世界に誇る関西の土木事業」、「小型月着陸機『SLIM』が月面着陸」、「阪神大震災から30年、今後の地震への備え」などです。参加者の皆さんのメモを取る熱心さや講演の後の質問の多さに感心しています。

ふたつめは、将来の社会を担う若い方を対象として、技術やモノづくりの楽しさを知っていただこうということです。小学1年生から6年生までの児童を対象に、「夏休み応援ラボ」の「ふしぎの研究室」として原理や法則をわかりやすく説明し、工作する活動をしています。作業中の子どもたちの生き生きした顔や、終わったあとで迎えに来た保護者に会ったとたん、作成したばかりの作品を見せて得意げに説明する姿を見ることができます。

後日、ある保護者から次のような手紙が届きました。「娘がつくったからくり屏風が壊れたので、先生の見本を見ながら、うちにある紙を使って、添付写真のようにふたりで復活させました。先生にもご覧いただければうれしいです。娘が先生のおっしゃったことをよく覚えていてくれました。（要約）」

実施した私たちにとって、これまでにない感慨や充実感を味わうことができています。

「図書館とアート」

瀬尾真理子/アートナビゲーターTetoMeto

2024年から、「お仕事帰りのアート鑑賞サロン」というイベントを定期的に開催しています。内容は、プロジェクターに投影した絵画を、予備知識がない状態で鑑賞し、気付いたことや感じたことについて対話するというもの。図書館の利用者が比較的少ない平日夜の時間帯にもかかわらず、学校帰りの学生さんや仕事帰りの社会人、図書館常連のシニア層、たまたま通りかかった方など、さまざまな年代の方がいらして、毎回なかなかの盛況です。

どこの図書館にもだいたい、美術全集ってありますよね。大きくて重くて、1冊1万円以上もして、自分ではまず買えないやつ。あれ、利用している人をあまり見たことなくて、もったいないなあと前々から思っていたんです。そこで、イベントで鑑賞する作品は、美術全集の図版を活用しています。鑑賞する作品に関連してDチーム担当スタッフの方が選書してくだった書籍も会場に多数展示し、興味を持った人が借りられるようにしています。

アート作品も本も、世界につながる窓のようなものだと思います。どこかの時代の、どこかの国の、誰かのフィルターを通して見る世界。そして、同じアート作品や本に接していても、見る人、読む人によって、そこから見える世界は少しずつちがいます。正解のない対話を通して一人ひとりのちがいが丸ごと受け入れられ、作品と私たちの「今」がつながっていく。そんな体験をするのに、図書館はまさにうってつけの場所ではないでしょうか。

「親子で活動する楽しみ」

益山かおり/きくちゃん・こっちゃん

数年前、明石に引っ越してきたとき、「このまちで出会う人を笑顔にしたい」と強く思い、母である私が絵本と紙芝居の読み聞かせを始めました。その姿を見た娘のこっちゃんが「かっこいい！私もまわりの人を笑顔にしたい！」と言ってくれたことが、親子で活動を始める大きなきっかけになりました。

こっちゃんが絵本を読むと、子どもたちの目がぱっと輝きます。同じ子どもだからこそ届く力があり、「私もやってみたい」という気持ちが広がっていくのを感じます。親子で練習を重ねる時間も、本番で喜びを分かち合う瞬間も、私たちにとってかけがえのない宝物です。親子で活動することは、地域の中に居場所と安心の輪を広げることだと感じています。図書館は私たちにとって学びと成長、そして「つながり」の場です。

図書館のDチームスタッフの皆さんは、私たちボランティアを支えるだけでなく、同じ場を共に育てる仲間です。あたたかく見守り、挑戦を後押ししてくださる関係があるからこそ、親子で安心して一歩を踏み出すことができます。

これからも親子で、明石のまちに小さな笑顔の種をまき続けたいと思います。そして、いつも支えてくださる図書館とDチームの皆さんに心から感謝しています。



SIDE B　図書館スタッフ

0. 図書館のなかで何が起きていたか

さて、前半はDチームの声を紹介しました。次は、図書館の運営担当者やDチームに関わるスタッフ、ファシリテーターの声をお届けします。「ボランティアと呼ばない」関係を作るためにはそれなりの（いやかなりの）時間がかかりました。そして、共に行動するまでの道のりは決して平坦なものではありませんでした。今この時にも、積み残したいくつもの課題を抱えています。

これから、プロジェクトのはじまりと、その後手探りで進めてきた8年間について、各担当者からお話しします。読者の皆さんには、プロジェクトを遂行する上で何が問題だったのか、折り合いをつけるために図書館スタッフがどのような行動をとったのかについて知っていただければと思います。

1. ボランティアとよばないで、図書館で市民活動のしくみを考える

髙島信之/元総務統括

1-1. ミュージアムのパートナーシップ制度から

はじめに、私自身が関わった兵庫県立有馬富士公園（以下、有馬富士公園）の事例についてお話ししたいと思います。有馬富士公園は2001年4月に開園しました。私は行政職員として、公園運営のあり方を考える「有馬富士公園運営協議会」に参加していました。協議会には、住民委員をはじめ、兵庫県、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県園芸・公園協会、三田市など、公園運営に関わるさまざまな立場の人が集まっていました。

協議会では、「県民・市民が主人公となる公園運営」をテーマに、勉強会が行われていました。当時の私にとって「ボランティア」とは、有償で施設運営を手伝ってもらう存在であり、少なくとも交通費や弁当代などは支給されるもの、という認識でした。

しかし、勉強会が進むにつれて、「ボランティア」という言葉では表しきれない、新しい考え方が少しずつ形になっていく瞬間に立ち会っているのだと感じるようになりました。そこから生まれたのが「ありまふじ夢プログラム」です。その趣旨には、「みなさんは〈来園者＝ゲスト〉ではなく、ホストとなって、私たちといっしょに子どもたちにプログラムを提供したり、自然環境を調べたり、公園を整備したり、将来のことを語り合ったりする存在です」
と書かれています。

有馬富士公園と同じような考え方は、他の施設にも見られます。滋賀県立琵琶湖博物館では、2000年8月に「はしかけ制度」が始まりました。制度の説明では、会員を博物館運営の「補助者」とは考えず、「共に博物館をつくっていくパートナー」と位置づけています。ここでも、博物館と市民との関係を対等なものとして捉えようとする姿勢が示されています。

こうした事例から振り返ると、2000年代初めは、自然科学系博物館を中心に、市民との協働のあり方について大きな意識の転換が起きていた時期だったのではないかと思います。

1-2. 新しい図書館では、ボランティアではない市民活動

次に、あかし市民図書館の取り組みについてお話しします。当館は2017年1月27日、県立明石公園内の旧図書館から、明石駅前の複合商業施設「パピオスあかし」

4階に移転し、あかし市民図書館としてオープンしました。新館の構想にあたって、私たちが考えたのは、従来の「図書館ボランティア」という言葉から連想される、「図書館が仕事をお願いし、市民がそれを手伝う」という関係とは少し違う活動のあり方でした。自然科学系博物館での経験を通して、「自分自身が学びを深め、その学びが将来につながっていく活動が、図書館の中で生まれてほしい」と考えるようになったからです。

図書館には、学校教育とは異なる社会教育の場としての役割と、生涯にわたって学び続けることを支える生涯学習の場としての役割があります。このふたつの学びが重なり合い、地域に根差した活動になるよう、私たちが大切にしたのは、「図書館で学んだことを生活に生かし、楽しく暮らす自分をつくり直していく」という循環でした。

そのためには、図書館の運営に市民が関わること、そして市民参加・参画を図書館づくりの柱に据えることが必要だと考えました。2025年現在、図書館は本や情報を提供するだけの場ではなく、市民とともに形をつくっていく存在へと変わりつつあります。あかし市民図書館の取り組みも、そのひとつの試みとして位置づけられるのではないかと感じています。

1-3. 市民と図書館がどのような関係を築くのか

ここで、ある日の図書館事務所で耳にした、スタッフ同士の会話を紹介します。

「今日は開架書架に返却する本がたくさんたまっているね」
「返本する時間がなくて困るね」
「返本のボランティアが早く来てくれたら助かるのに」

何気ない会話ですが、そこには「仕事をお願いする側」と「手伝う側」という関係が自然に表れています。当館では50人以上のスタッフがシフト制で働いており、異動や退職もあるため、日々の業務内容を共有することも容易ではありません。そのため、「ボランティア」に関する考え方は、どうしても後回しになりがちです。

この場面で、「彼らはボランティア（手伝い）ではない」とスタッフに指摘することはできます。しかし、それ以上に難しいと感じたのは、「市民が図書館で活動することで、学び、楽しむために、スタッフはどのように関われればよいのか」という考えを共有することでした。こうした感覚は、言葉で説明するだけでは伝わりにくく、スタッフ自身が市民と活動を重ねる中で、少しずつ実感していくものなのだと思います。

別の日には、次のような電話もありました。

「図書館でボランティアをしたい。困っていることがあれば何でも手伝います」

その気持ちはとてもありがたいものですが、ここで作業を依頼することが、必ずしも私たちの目指す関係ではありません。このやりとりから、市民にとっても

スタッフにとっても、新しい関係性を築くには意識の切り替えが必要だと感じました。私たちが目指す「ライブラリー・パートナー」は、図書館と市民が互いに学び合い、無理のない形で寄り添う関係です。

1-4. 運営上のルールづくり

2016年、旧館で新館移転の準備を進めていた頃、館長、館長代理、企画広報担当者と私とで、このプロジェクトの構想について話し合いを始めました。まず簡単なガイドラインを整え、その後、外部ファシリテーターを含む体制へと広げていきました。プロジェクト開始直後、ある程度の混乱が起きることは企画段階から想定していました。そのため、プロジェクトを進める上で、第三者も交えた合意形成の場が必要だと考え、ワークショップ形式で話し合いを持つことにしました。

内部の体制としては、企画広報担当が事業全体のマネジメントを担い、図書館スタッフ3名が参加者と図書館をつなぐ実務担当となりました。広報誌での公募、説明会、ワークショップを通じて市民との最初の接点をつくり、その後は参加者の意見を踏まえながら、次のアクションを検討していきました。図書館内外で活動する際のルールも、図書館と市民が合意しながら整えていくことを大切にしました。

試行錯誤を重ねるなかで、「とにかくやってみる」ことを積み重ね、2025年、活動開始から8年を経て、「明石市立図書館 市民による夢の図書館プロジェクト（通称Dチーム）制度運営要項」（資料掲載ありpp.52-54）を整理しました。

その趣旨では、ライブラリー・パートナーを「市民の『読みたい』『知りたい』『調べたい』に寄り添い、『暮らしにプラスα』をもたらす図書館の理念を共に実現する存在」と位置づけています。課題は残されていますが、指針を明文化したことで、市民と図書館の協働関係をより深めていく基盤が整いました。

図書館は地域や人によって姿を変える存在です。図書館に関わる人々とどのような関係を築くのか。その問いこそが、プロジェクトを考えるうえで欠かせない視点であることを、多くの方に共有できればと思います。



「2017年6月 第1回説明会 会場風景」

2. ボランティアと何がちがうの？

田中梨枝子/企画広報担当

2-1. 図書館パートナーと言われても・・・

『明石市立図書館10年のあゆみ』には、図書館開館の翌年1975（昭和50）12月に「おはなしの会グループ」（ボランティア）が発足したことが記されています。その活動について次のように紹介されています。

「なかでも〈おはなしの会」は盛況である。毎月2回開いており、9年目を迎える今年で150回を数え完全に定例化してきている。話し手はボランティアグループに頼っているが、熱心なボランティアラーの人々に支えられ、毎回50人の子ども達が参加した楽しい童話の世界が繰り広げられている。」

このように明石市では、市民ボランティアが本と人を繋ぐ図書館の活動を支えてきました。しかし、私が着任した2016年頃には、ボランティアと図書館スタッフとの関係は、活動に関心を持つ人々だけの交流にとどまっていたように思います。

新図書館では、体験学習や参加型プログラムなど、市民が参画できる機会を積極的に展開していくという構想がありました。私は企画・広報担当として、こうした新規事業の企画立案と運用を主な業務としていました。図書館に着任する以前には、美術館の教育普及事業の企画運営や、歴史博物館で市民ボランティアに関わる仕事に携わってきました。その経験をふまえ、新館移転にあたって大きな課題のひとつだと感じていたのが、ボランティア制度の見直しでした。

旧館時代に築かれてきた関係性があることも十分に意識しながら、新館では新たな参加者をできるだけ多く受け止められる制度を考えました。総務統括から「自然科学系博物館のパートナーシップ制度を手本にしてはどうか」との提案を受け、それらの制度設計について調べることから始めました。滋賀県立琵琶湖博物館の「はしかけ制度」をはじめ、関西圏の自然科学系博物館の「友の会」など、市民協働の仕組みを参照しました。さらに、新図書館で想定される活動を思い描きながら、当館独自のボランティア制度の枠組みを少しずつ形にしていきました。

とはいえ、やっかいなのは「ボランティア」という言葉そのものです。この言葉は、使う人によって意味合いが大きく異なります。だからといって、ボランティアという言葉を使わず、いきなり「パートナーシップ」と言っても、多くの人にすぐ伝わるものではありません。いずれにしても、実際に参加される市民の方々との関係を築くことが何よりも先決であり、活動しながら制度を整えていくしかないと考えていました。できる限り準備はするものの、最後は出たとこ勝負。そのような気持ちで臨んでいました。

2-2.「ボランティアをしたい」市民が集まりました

2017年5月にボランティアの公募を開始し、6月に説明会、7月には第1回ワークショップを開催しました。説明会では、図書館が協働したいと考えているメンバー像や想定する活動内容、登録方法、そして活動を始める前にワークショップへの参加が必須であることなどをお伝えしました。

広報誌に「ボランティア募集」と掲載したのですから、「ボランティアをしたい」と考える方々が集まるのは当然のことでした。そのため、説明会では多くの方が戸惑いを感じたようでした。特に「グループでの活動を基本とし、活動内容は自ら提案する」という基本方針に対しては、「ひとりで活動したい」「図書館の手伝いをしたくて応募した」「自分で活動を考えるのは難しい」といった反発の声が上がりました。

また、旧館時代から活動していたグループのメンバーは、「なぜ自分たちは、この場に参加しなければならないのか」「以前のように活動できないのか」など困惑した様子でした。旧館時代は、ボランティアの皆さんと十分に話をする機会がほとんどなかったため、この場で初めて、皆さんの率直な思いに触れることになりました。現場はまさに大混乱です。

続いて開催した第1回ワークショップでも、参加者が思い描く「ボランティア」のイメージと、図書館が想定していた活動の姿は、大きく食い違っていました。振り返ると、図書館側が提示した制度や活動の趣旨は、参加者にほとんど伝わっていなかったと思います。私たちは相手の状況を理解せず、前のめりに物事を進めようとしていたのかもしれません。

こうした参加者の様子を目の当たりにし、図書館スタッフは「もっと話し合う時間が必要だ」と気づきました。そこでまず、図書館で何ができるのか、何をしてみたいのかについて、できるだけ時間をかけて、一人ひとりの声を聞き、意見を交わすことから始めることにしました。

2-3.「皆で話し合い、ルールを作る」おためし企画の提案と実践

2017年度は、ワークショップの機会を多く設けました。図書館で活動するといっても、まったく経験のないメンバーもいれば、旧館時代から定期的に活動してきたメンバーもおり、できることや得意なことはさまざまでした。

そこで、皆で話し合い導入したのが「おためし企画」です。これは、いわば活動のスタートアップの仕組みでした。例えば、「読み聞かせ」や「紙芝居」をやってみたいメンバーは図書館スタッフと一緒に読み聞かせの研修会に参加し、その後グループメンバーだけでプレイベントを行う。活動歴の長いボランティアグループの活動を見学したり、参加体験をしたりする。あるいは、グループでミーティングを開いたり、他のグループのメンバーに声をかけて「てづくり会」や「指ヨガ」の会を開いたりする。

このように、まずはプロジェクトの仲間が協力し、本番に向けての練習やイベントの模擬運営など、活動のための技術を磨く機会を作り、少しずつ経験を積むこと

にしました。おためし企画を重ねるうちに、メンバー同士の交流が生まれ、グループとしての結束感も高まっていったように感じます。新しい企画のアイディアについて話し合ったり、イベントの後に誘い合って食事に出かけたりと、仲間同士で楽しそうに行動する姿が見られるようになりました。

2-4. 自分たちの活動に名前をつける

2018年3月末のワークショップで、「自分たちの活動に名前をつけよう」という意見がまとまりました。プロジェクトが動き始めてから約10か月が経ち、「とりあえずやってみよう」「4月からは来館者を対象にしたイベントをしよう」と、多くのメンバーが何らかの活動に関われるようになった頃でした。

これまでのワークショップでは、活動を進めるための具体的な方法を話し合うことを優先してきましたが、その一方で、「これから挑戦してみたいこと」や「あかし市民図書館の未来」について語り合う時間も大切にしてきました。ファシリテーターと、参加メンバー、図書館スタッフが一緒になって、明石の図書館の未来について考え、プレゼンテーションを行う場面もありました。そうしたプロセスを通して、理想とする図書館のイメージが共有され、最終的に「市民による夢の図書館プロジェクト」という名前が生まれました。

新規加入メンバーには「なぜDチームなの？」と思われる不思議な名称ですが、実は自分たちの活動が明石の未来へとつながっていくように、との思いが込められています。最初の1年は混乱と手探りの連続でしたが、2年目に入る頃から来館者を対象としたイベントが実施されるようになり、少しずつ活動が軌道に乗り始めました。2年目以降は、他の図書館や施設で活動していたグループが参加するなど、登録者数は当初の10数人から、いつの間にか100人を超える規模になっていきました。しかし、立ち上げから4年目、館内での活動が活発になり、「これからは館外やまちなかにも活動を広げていこう」と機運が高まった矢先、2020年4月、新型コロナウイルス感染症の拡大により図書館は臨時休館、Dチームの活動も中断されました。



「2017年7月　第1回ワークショプ会場風景」



「パイオニアチームが企画したおためし企画“指ヨガ”活動風景」

3. コロナ禍でどうする！？
長い休み期間にあったこと

田中範子/Dチーム担当

3-1. 思わぬ長期戦になりました

2020年2月まで、Dチームは平常どおり活動を続けていました。しかし、新型コロナウイルス感染症に関する報道が増え、外出自粛の空気が広がり始めた2月半ば頃から、メンバーの間で「今後イベントは開催できるのだろうか」という不安の声が上がり始めました。

同月27日、明石市から図書館へ指示があり、29日に予定していたワークショップと、3月末までのすべてのイベントの中止が決定しました。その後、国および兵庫県の方針を受け、感染拡大防止のため、あかし市民図書館は2020年4月15日から5月19日まで臨時休館となりました。

Dチームの活動も、すべて休止せざるを得ませんでした。この時は、宣言が解除されれば、すぐに再開できるものと多くの人が思っていたのではないでしょうか。しかし、感染症の影響は長引き、以前のように気軽に集まり、話すことはできなくなりました。私自身もしばらく図書館へ出勤できない期間があり、Dチームの活動は停滞しました。

当時、メンバーとの連絡手段は電話、来館時のやりとり、郵送に限られていました。活動停止からしばらくして、現状の報告と今後の活動について、メンバー宛に手紙を出しました。5月6日付の手紙では、「非接触で、イベントの形式をとらない活動のためのしかけづくり」と題し、以下のような提案しました。

Dチームと図書館で「一緒にできること」（案）
- Dチームメンバーによるコラム紹介発行
- 「PRESS+D」（Dチーム活動をポスターで紹介）の掲示
- 活動（イベント内容）に合わせた展示（ブックリストの作成と設置）
- 本の紹介コメント付き資料展示
  本の紹介文付きで本を展示をする。
  読んだ利用者から返事として「メッセージカード」をもらう
- 電子図書館の活用
  例）語りをする活動をしている人
  →録音データを電子図書館にアップロードする。
- オリジナル作品の公開（作成者の使用許諾がおりれば）

手紙の末尾には、「どのような内容でも構わないので、Dチームの関係が途切れないよう、5月中に一度、郵送で連絡を取りたい」と記していました。読み返してみると、当時の混乱や手探りの状況が思い出されます。

その後、緊急事態宣言が解除され、図書館は開館しましたが、2021年1月と4月、さらに2022年1月には、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が続き、対面での事業が実施できない日々が長く続きました。結果として、元どおりにイベントを開催できるようになるまでには、2年以上の時間を要しました。

当時の私たちは、先の見とおしが立たず戸惑うばかりでした。予定していたイベントは次々と中止となり、その都度、図書館スタッフからメンバーへ連絡を入れることになります。「残念だ」という声とともに、「こんな時だからこそ頑張って」と励ましの言葉をいただくこともありました。皆で集まり活動していた日々を思い返し、それがどれほど貴重な時間だったのかを、改めて感じることになりました。

3-2. 良いことも悪いことも

最初の緊急事態宣言が解除されると、開館を心待ちにしていたメンバーから、イベント再開についての相談が相次ぎました。しかし、密を避けるため、会議やワークショップは実施できず、図書館からの連絡は、引き続き手紙が中心でした。それでも、受け取ったメンバーから「ありがとう」と声をかけてもらうことがあり、つながりを感じる場面もありました。

一方で、状況はなかなか好転せず、緊急事態宣言が繰り返される中で、予定していたイベントの中止が続きました。参加者だけでなく、メンバー自身の感染リスクを考慮し、開催を見送る判断をすることもありました。加えて、日時の変更が直前に生じ、メンバーの都合がつけられず結果として中止になるケースもありました。

活動するメンバーの姿がない図書館のフロアは、いつも以上に静かで、寂しく感じられました。手紙に「できる時がきたら、できる形でスタートしましょう」と書いたように、私たちも、メンバーの「早く活動したい」という思いを強く感じていました。朗読グループから「いつから（集まって）一緒に発声ができますか」と質問を受けたときには、その光景を想像し、心待ちにしたことを覚えています。

しかし、思いに応えきれない場面もあり、スタッフとメンバーの間に軋轢が生じることもありました。不安や苛立ちを抱えていたのは、誰もが同じだったのだと思います。私たちも、どうすればよいのかを模索する日々が続きました。

やがて図書館スタッフの間では、コロナ禍で安全にイベントを実施するための検討が始まりました。マスクの着用や消毒の徹底、体調確認のためのチェックシートの作成、イベント参加者定員の見直し、ソーシャルディスタンスマークの作成、会場レイアウトの工夫などを重ねました。館長とも相談しながら、安全対策を講じた「Dチームの新しい活動基本モデル」を作成し、メンバーと共有していきました。

連絡の不自由さや意見の食い違いなど、難しい場面も多くありましたが、こうした経験は、プロジェクトに関わる人たちの間に、少しずつ連帯感を生んでいったように思います。困難な状況を「自分事」として受け止め、ともに向き合ったことで、心の距離は確かに縮まりました。

3-3. ようやく再開して

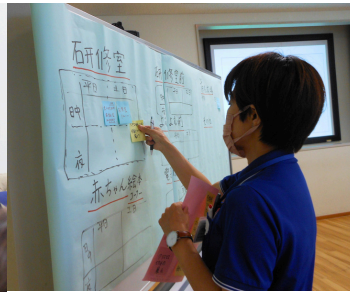
2020年7月20日以降、感染症の対策を講じた上で一部の活動を再開しました。最初に活動したのは、返却本を本棚に戻し書架の整理をするおてつだいチームでした。さらに感染症への安全対策ガイドラインに従った策を講じて、来館者を迎えたおはなし会が始まりました。

イベントを再開できた時、言葉では言い表せない感動がありました。なによりメンバーのお顔が嬉しそうでした。利用者もメンバーの気持ちを感じ取ったようで、その場にあたたかい輪ができていたように思います。安全対策については、Dチーム担当者と、時に館長を交え、安全に活動を継続できることを最優先で考えました。安全対策を講じてイベントを実施した後も、メンバーの困りごとや意見を聞き取り、何度も改訂を重ねマニュアルができていきました。

3-4. 関係性を見つめなおした時間

思いがけず始まったコロナ禍でしたが、その対応を通して、スタッフとメンバーが一緒にルールづくりを行う機会が生まれました。その過程で、これまであまり意見を交わすことのなかったメンバーの考えや思いに触れることもできました。
それまでは、互いの立場や役割を意識するあまり、考え方をすり合わせるところまで踏み込むことは多くなかったように思います。だからこそ、この長い休止期間は、プロジェクトの原点を見つめ直すと同時に、その進め方や未来を考え直す時間でもありました。

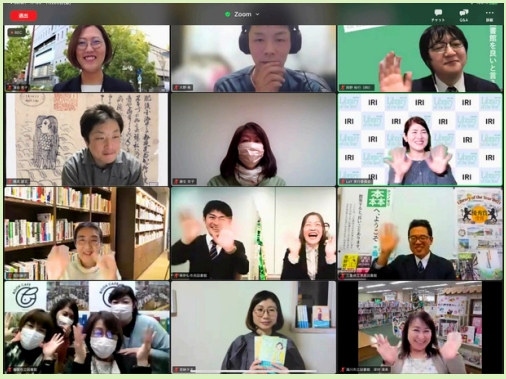
これからも、メンバー一人ひとりと向き合い、関係性を大切にしながら、ともに歩んでいきたいと考えています。

「2022年6月第９回ワークショップ会場風景」



「2020年9月新しい活動モデルで実施されたおはなしの会」



「Library of the Year 2021 最終選考会の一幕」

コロナ禍の長い活動休止期間は、図書館にとってもDチームにとっても転換期になりました。図書館では臨時休館中に「絵本の宅配便」、開館後には「非対面型イベント」などを実施し本や読書体験を市民に届けることに奔走しました。

2021年には、「Library of the Year」の優秀賞とオーディエンス賞をW受賞しました。受賞に際して、直接語られてはいませんが、Dチームの取り組みもまた多くの方から評価をいただいたはず、と図書館スタッフは信じています。

4. ファシリテーターとDチームと未来の当たり前

中脇健児/ファシリテーター

4-1. しがらみをみつけるところから

「図書館と市民が対等に話し合いながら協働していく場をつくっていきたい」。当時の志水館長と企画広報担当の田中さんから、そんな相談を持ちかけられました。私はコミュニティデザイナーとして各地で協働プロジェクトを多く手がけており、「公園のような図書館」を標榜している伊丹市立図書館「ことば蔵」のスタートアップにも関わっていましたので、何を目指したいかは大体イメージできました。当時、図書館業界は空前の「無料本貸し施設からの脱却」や「社会全体の本離れへの対策」を図っていたと記憶しています。民間運営の公立図書館や、カフェの併設、ビブリオバトルといった各種イベントの実施など多様な利用や地域社会との関わり方が模索されていました。その裏返しには「図書館は静かに本を読むところだ」といった価値観が、「古い・暗い・辛気臭い」といったイメージをうみ、新しい人が関わりたいと思えない施設になっていたこともあったでしょう。

ですので、私がこの相談を受けたとき、当然のように、先述の価値観はどれくらい明石市立図書館にあるか聞きました。「大丈夫。移転新規オープンだから、そんなしがらみはない。むしろ、新しい人の参加が多いから、キッカケには一番いい」とのことでしたが（しかし実際は、古くから図書館で活動している方や、図書館のお手伝いをイメージしていた方が多く）最初のワークショップは開始30分で不具合を感じ（と言うより不満が続出し）、即興で進行内容を全て変えて、どうにか乗り切った、と言うのが正直なところです。しかしながら、同時にそこで感じたことは「これだけエネルギーがあって、なおかつ本が好き、と言うのは可能性の塊じゃないか」と思ったことも事実です。漁師町としての土地柄なのか、神戸でも大阪でもない独自の文化圏かつベッドタウンだからこその住民自治のパワーなのかは分かりませんが、どの街にもない力強さと品を兼ね備えているのは、稀有だなと今でも思っています。

4-2. 押すのか、引くのか

当時、私自身も30代半ばで、参加の皆さんからすると若輩者であったことは否めません。そこで次回からは必ず「今日はこんな目的と内容を考えてきましたけど、皆さん、違和感ありませんか？」とお伺いし、進行中も「わかりにくいことありま

すか？」と都度聞きながら進めていました。また、私が行政や図書館のスタッフではないので、その時々で市民の皆さんの声に賛同することもあれば、行政・図書館事情を代弁し「それは立場上、厳しいと思いますよ」と譲歩や声を収めていただく理解を求めることもしました。その第三者感がよかったと思います。毎回「もっとこうした方がわかりやすい」「ルールが曖昧だとかえって、職員さんに聞こうにも気を使って聞けない」など率直なフィードバックをいただけました。その場で検討可能な大枠はすぐに修正し、難しいものは「検討事項にさせてください」と伝え、必ず次回に結果を伝える。

このようにお互いの立場や気持ちを尊重しながら議論し、誠実に応え合うやりとりに、協働関係が出来上がっていきました。“自分たちが使いたい図書館”、“図書館にくる人が喜んでくれる図書館”を目指すために「三歩進んでは二歩下がる」をスタッフも市民の皆さんも一緒になって創り上げていけたことが大きな成果だったと思います。

4-3. 誰でもできる、が、覚悟はいる

さて、これらのことは明石市だからこそできたものだったのでしょうか。多分、この感覚は関わった人たち全員と共有していると思うのですが「半分はそう思うし、半分はそう思わない」ではないでしょうか。本来、公共の場は、全員のものであって、行政のものではないのです。特権的な立場の人が独善的に使用方法を決めたり、既得権益を囲い込むようなことはあってはなりません。誰もが自分たちの主張を述べ、他者の意見にも耳を傾け、対話を尽くし、試行し、検討しながら、双方の折り合いがつく制度や関係を創出すべきなのです。しかし、多くの行政や公共施設はこういったプロセスを避けて通りがちです。また、行政という組織や制度の構造上、“どうなるかわからない”と言う未分化なものをそのまま許容して進めること（予算化やプロセスを評価すること）は苦手としています。それを踏まえて行政や図書館が「市民協働をやる」と決断したことは明石市の独自性であったと言えるでしょう。

もちろん「公共施設としては大切なのはわかるが、図書館の独自ミッションがおざなりではないか」という指摘も理解できます。ただ市民や図書館で働くスタッフの方が、図書館や本を通して、今まで出会わなかった地域活動や社会と出会い直しが行われることは、今後は必ず重要な価値観になります。人口減少、少子高齢化、格差、多国籍化、税収減が象徴するように下降かつ課題が散見するにも関わらず、社会包摂的な価値観はますます重要視されているのが今の日本社会です。行政施策として単一施設（事業）が単一目的を目指すようでは、資源（リソース）が間違いなく足りません。ひとつの施設があれもこれも兼ね備えている（もしくはひとつの取り組みが結果的に複数の目的を兼ねている）、と言う複合的な動き方をせざるを得ないはずです。そのため、図書館であっても市民活動の拠点機能を果たすことや、スタートアップの支援になるようなこと、まちの賑わい活性に寄与することも求められます。

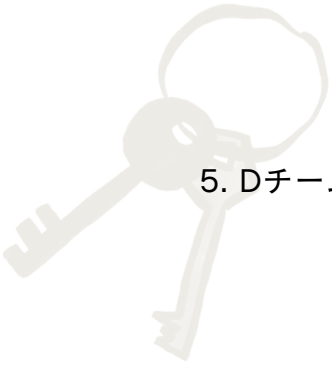
もちろん、市民活動の場を整えることは、“社会的処方”という考え方が注目されているように、市民の心身の健康に大きく貢献します。

4-4. 未来の当たり前

専門施設・専門職と、包摂的かつ複合的な取り組みは「狭く深く⇔広く浅く」というような“水と油”をイメージさせるかもしれません。しかし、何度も言うように、少数かつ多様な価値観、背景を持つ一人ひとりを大切にしていく社会の実現において、従来の専門性とは違う、新たな専門性の意味合いが求められているとも言えるのです。そういった意味で明石市立図書館の試みや蓄積は、未来における「当たり前」を創出している専門施設とも言えるのではないでしょうか。



「2018年11月第5回ワークショップ会場風景」



5. Dチーム、正直分かりにくいです

姫路礼子/Dチーム担当責任者

5-1. Dチームとボランティアの違い、難しい

私は他自治体の図書館からの異動で、2022年に着任しました。それ以降、Dチームの担当責任者として、メンバーの活動支援や新たに活動を希望する方のサポート、各団体とのコーディネートなどを行ってきました。

これまで、いわゆる図書館ボランティアの枠組みについては知っていましたが、明石に来てDチームを担当した当初は、通常の図書館ボランティアと何が違うのかを、すぐに理解することができませんでした。そのため、「Dチームは正直わかりにくいし、説明もしにくい」と、私自身が感じていました。

窓口などで「図書館でボランティアがしたい」という問い合わせがあった場合は、Dチーム担当スタッフが引き継いで対応します。まず、その方がイメージしている「ボランティア」とはどのような活動なのか、すでに希望している活動があるのかなどを伺い、そのうえでDチームの趣旨や考え方について説明しています。

実際には、ボランティアを「無償の活動」として捉えている方や、「言ってもらえれば何でもしますよ」とおっしゃる方も多くおられます。そうした方の多くは、「図書館が活動内容を指定するのではなく、自分たちでやりたい活動を考え、実行していく」という点を説明した際に、「それはボランティアではないのでは？」と戸惑われます。

そこで私たちは、現在図書館で活動しているさまざまなグループの事例を紹介し、実際に活動の様子を見学してもらうことを勧めています。見学に来られた方が驚かれるのは、団体数や人数、活動の多様さだけでなく、当館が本当に「自分のやりたいことを実現できる図書館」であるという点です。「図書館で、こんなこともできるんですね」という感想を聞いて、ようやく私たちも少し安心します。こうした反応が、「Dチームの趣旨が伝わった」と感じられるひとつの目安になっています。

また、Dチームのワークショップを経て正式に登録した方は、その後いずれかの活動に参加することになりますが、そこにも個人差があります。見学を通して、「何かしたい」という漠然としたイメージが具体的になる方もいれば、参加したい団体を見つける方、「自分だったら……」と新たな活動を思い描く方もいます。そうした姿を拝見するたびに、Dチームの考え方が少しずつ伝わっていることを実感し、嬉しく感じています。

5-2. 見える化プロジェクト始動、メンバーとの話し合い

2024年2月に開催した第13回ワークショップの議題は、「Dチームのこれから」でした。Dチームの未来について話し合う中で、ある課題に行き着きます。Dチームはさまざまな活動を展開しているにもかかわらず、その名称の由来や活動に関する情報が、市民や図書館で新たに活動を始めたい人たちに十分届いていないのではないか、という意見が出されました。また、「自分も図書館でボランティアをしたいと思ったときに、どこに問い合わせればよいのか分からなかった」という声もありました。

こうした意見を受け、より多くの方にDチームの存在を知ってもらうため、「Dチーム見える化プロジェクト」を立ち上げることになりました。ワークショップの中で、一緒に考えてくれる有志を募ったところ、2名の方が手を挙げてくださいました。

2024年3月には、有志の方々、Dチーム発足当初から関わっているファシリテーターの中脇さん、図書館スタッフが集まり、第1回の打ち合わせを行い、プロジェクトが動き始めました。

5-3. ３つの活動

プロジェクトでは館内掲示板、広報誌（Webサイト）、イベントの3点の活動に取り組むことを決めました。

ひとつ目は、図書館を訪れた際に、Dチームの活動について情報を得られるようにすることです。コロナ禍の影響で活動を縮小していた時期があり、館内掲示は散在していました。そこで、当館の展示スペース「シンボルツリー」を活用し、ポスターやチラシ、おはなし会のプログラム、紹介している本などを集約しました（後に、ポスターやチラシは専用の掲示板へ移行しています）。

ふたつ目は、図書館に来なくてもDチームの活動を知ってもらうための取り組みです。図書館広報誌『Press＋あ』や図書館ホームページへの掲載、始動した年の11月にあかし市民広場で開催された「アートパフォーマンスフェスタ イン 明石」への出展を検討しました。

『Press＋あ』ではDチームの特集を組み、新しく始まった活動を中心に活動報告を掲載することになりました。また、ホームページに活動案内や活動報告、グループ一覧を掲載することも決定しましたが、その後、市内で 3 館目となる新しい図書館、二見図書館の開館時期が公表されました。これまでDチームは、あかし市民図書館と明石市立西部図書館の二館を中心に活動してきましたが、新たに二見図書館が加わることで、明石全体での活動のあり方を改めて考える必要が生じました。そのため、Webでの情報発信は、二見図書館の動きと足並みをそろえることとし、いったん保留する判断をしました。

その後、二見図書館では新たな図書館サポーター制度が立ち上がり、当館でDチームを担当していたスタッフが異動し、制度の立ち上げと運用に携わっています。Dチーム運営の反省をふまえ、より親しみのある関係性の構築と地域に寄り添った活動が展開されていくことを期待しています。

少し話がそれましたが、2024年11月に開催されたアートパフォーマンスフェスタでは、Dチームの活動を前面に出したブースづくりを行いました。各グループへのヒアリングをもとに紹介スライドを作成し、会場で上映したほか、メンバー有志の方々が手づくり会を実施してくださいました。イベントは参加者から好評を得ることができました。これらの経験が、2025年12月のDチーム単独でのフェスタ開催へと結実しました。Dチームだけであかし市民広場を全面貸し切り、ステージパフォーマンスと司会進行、ブース出展とその運営も全てDチームメンバーが切り盛りしました。この経験はメンバーと図書館スタッフの協働による大きな試金石になりました。

最後の活動は、ブックレットの作成です。まさに今、手に取っていただいている本書がそれにあたります。Dチームのこれまでの歩みや、活動に関わるメンバーの声をまとめた一冊です。

「Dチームってなんなん？」「ようわからへんね」と言われていたところから、「Dチーム、楽しそうですね」「今日も活動おつかれさま」と声をかけていただけるようになるまで、はっきり言って時間がかかりました。これからも、新しく加入するメンバーからは「Dチームってなんなん？」と言われることもあるでしょう。しかし、わかりにくい名前だからこそ、託された思いや意味を探る面白さがあるのかもしれません。これからも、Dチームの活動を「見える化」しながら、丁寧に伝えていきたいと考えています。



「2024年3月第1回見える化プロジェクト会議」

私たちの未来、Dチームのこれから

Dチーム担当図書館スタッフ一同

Dチームメンバーの新入会と退会があるように、図書館スタッフもまた、この8年間で担当者の交代が何度かありました。引き継ぎの場面では、業務内容だけでなく、プロジェクトが持つ本質や背景にある意図を、次の担当者へ伝えることに難しさを感じることもありました。それでも、Dチームが立ち止まることはありませんでした。「図書館で楽しいことをしたい」「何かやってみたい」という思いを持った人たちが集う限り、プロジェクトは前に進み続けるのだと感じています。

「図書館での活動が生活の潤いになっている」「毎週の活動が楽しみで仕方がない」と語ってくれるメンバーの存在は、私たち図書館スタッフにとって誇りであり、日々の業務の大きな励みです。これからも皆で集まり、自分たちの活動を振り返りながら、「今の明石でやってみたいこと」「これから挑戦してみたいこと」を楽しく語り合えるプロジェクトでありたいと思います。

さて、前半ではDチームメンバーの声を、後半ではプロジェクト運営に関わる人々の声を紹介してきました。両者の言葉を読み比べて、どのように感じられたでしょうか。もし違和感やずれを覚える部分があったとすれば、それは対話がまだ十分ではないというサインかもしれません。そうした気づきも大切に受け止め、今後のワークショップでの振り返りにつなげていきたいと考えています。

メンバーの関わり方は実にさまざまです。深く関わる方もいれば、少し距離を保ちながら参加する方もいます。複数の活動に意欲的に取り組む方もいれば、ひとつの活動をコツコツと続ける方もいます。Dチームはそうした多様なメンバーがそれぞれのペースで、同じ目的地を目指し乗り合わせている船のような存在です。ほどよく、ゆるやかなつながりがあること。それがDチームの魅力なのだと思います。

これまでにお話ししたように、すべてが順調に進んできたわけではありません。メンバーの高齢化や活動方針の違いによる離脱や独立など、プロジェクト開始当初から抱えている課題もあれば、現場からの報告や相談をきっかけに新たに生じる問題もあります。ときにはすぐに結論を出せず、棚上げにせざるを得ないこともあります。それでも、その都度立ち止まり、自分たちの活動を振り返り、話し合い、新たなルールやあり方を考え続けてきました。制度や仕組みは、一度つくって完成するものではありません。現場には常に新しい風が吹きます。そのたびに皆で考え、その時点でよりよいと思える方法を選び取っていく――その積み重ねこそが、このプロジェクトの支えです。何をしたのかより、どのようなことを考え、話し合い、行動したのかというプロセスがとても大切です。

明石市立図書館には60年にわたる市民活動の軌跡があります。Dチームは、その文化を次の世代へとつないでいく役割を担っています。これからも、私たちの活動をあたたかく見守っていただけたら嬉しく思います。



Dチームのあゆみ
（略年譜）

年月	出来事	概要
2016年	構想・準備開始	新館移転後の市民協働の仕組みづくりを検討。ボランティア制度の刷新が課題として意識され始める。
2017年5月	ボランティア募集開始	市民が主体的に関われるプロジェクトとして公募を開始。
2017年6月	登録説明会開催	図書館が目指す協働の考え方や活動イメージを共有。従来の「ボランティア像」との違いに戸惑いの声もあがる。
2017年7月	第1回ワークショップ開催	参加メンバーは29名。図書館で何ができるか、何をしてみたいかを話し合う場としてスタート。対話を重ねる必要性を双方が実感する。
2017年秋頃	おためし企画導入	読み聞かせや紙芝居、てづくり会などメンバー間で行う試行的な活動を実施。経験を積み、交流を深める仕組みとして定着。
2018年3月	活動名称を決定	「夢の図書館プロジェクト（Dチーム）」と名付け、理想の図書館像を共有。来館者向けイベントも本格的に始まる。
2018～2019年	活動拡大期	新規メンバーや既存団体の参加が進み、活動グループ数・登録者数ともに増加。
2020年4月	図書館休館活動休止	新型コロナウイルス感染症拡大により図書館が臨時休館。Dチームの対面活動も全面休止となる。
2020年5月	非接触型活動を模索	郵送での連絡を通じ、展示・コラム・電子図書館活用など、新たな活動の可能性を提案。
2020年7月	一部活動再開	活動のためのガイドラインを整備し、返本・書架整理などから段階的に活動を再開。
2021～2022年	制限下での継続	緊急事態宣言やまん延防止措置の影響を受けながら、試行錯誤を重ね活動を継続。
2023年	活動の再活性化	対面イベントが徐々に戻り、各グループの活動も安定。新規参加者も増え始める。
2024年2月	見える化プロジェクト始動	情報発信不足を課題として共有し、「Dチーム見える化プロジェクト」を立ち上げる。
2024年11月	フェス出展	アートパフォーマンスフェスタ イン 明石に出展。活動紹介スライド上映や工作ブースを実施。
2025年3月	登録24グループに	登録メンバーが160名を超え、24グループ体制となる（市民図書館・西部図書館）。
2025年12月	Dチームフェスタ開催	有志メンバーにより、館内外で開催する大型イベントを企画・運営する



（資料）活動ガイドライン・運営要項

活動ガイドライン

市民による夢の図書館プロジェクトについて
夢（Dream）の頭文字をとって、Dチームと呼称します。
「自分自身が学び、楽しむ」活動を通して「理想とする図書館の実現を目指す」「明石のまちとひとを元気にする」ことを目的としたプロジェクトで、従来の図書館ボランティアという言葉からイメージされる「図書館の仕事を助ける」ための活動とは異なるものです。
明石市立図書館（あかし市民図書館および明石市立西部図書館）の活動に共感し、共に活動を進めていこうとする意志をもっている人々により構成されます。
Dチームメンバー同士のつながりや、図書館員との関係性を深めながら進めていくものです。

登録条件について
居住地や年齢による制限はありませんが、18歳未満の者は保護者の同意が必要となります（保護者と同じ団体へ登録する場合は不要）。
登録の際には、活動時の安全保障のため「全国社会福祉協議会ボランティア活動保険」への加入を必要とします。未加入の場合は、図書館が費用を負担して手続きを行います。既に各団体や他活動場所などで加入している場合は、手続き不要の旨を申し出てください。

登録方法について
Dチームワークショップ参加、もしくはDチーム登録講座の受講が必要となります。その後、活動理念や趣旨に同意を得られれば、登録申請書を提出して登録を行います。登録期間は1年間とし、年度末に更新手続きを行います。

登録後の流れについて
Dチーム登録後、希望内容に合う既存団体へ加入するか、新団体を立ち上げて活動を開始となります。
既存団体の活動を見学する場合は、事前に図書館へ連絡を入れ、必ず見学先の団体の了承を得てください。
団体は基本的に複数人から成るものとし、新団体を立ち上げて活動を開始する場合、活動内容が定まるまでは「おためし開催」を行うことができます。※ただし、将来的には図書館利用者の参加を目指すものとします。

企画について
企画立案者（団体メンバー）は、ワークショップで活動内容（日時）の承認を得た後、「企画申請シート」を作成して活動の 2 ～ 3 か月前に図書館へ提出し、図書館長の承認を得てください。
「企画申請シート」を基に図書館との打合せを行い、設備などのルールを必ず確認してください。

活動について
活動予定日にやむを得ず休む時は、必ず図書館へ連絡してください。
活動時は、Dチームの方針に沿って対応し、Dチーム用の名札を着用してください。
各自の貴重品は、各自で管理してください。
特定の団体の私物などは持ち帰り、長期的に図書館に預けないでください。

（2025年2月改訂）

明石市立図書館市民による夢の図書館プロジェクト
(通称Dチーム)制度運営要項(改訂版)

1. 趣旨
(1) 市民による夢の図書館プロジェクト制度は、市民に寄り添い、「読みたい」「知りたい」「調べたい」をお手伝いする図書館として、市民一人ひとりの「暮らしにプラスα」という基本理念を実現することを目的に設置する。具体的には図書館活動に参加し、自らを高めながら活動する人(ライブラリー・パートナー)が、活躍するための場を提供する。
(2) ライブラリー・パートナーの活動場所としては図書館内に限定しない。図書館内での読書推進に関連した諸活動のほか、環境学習フィールドとしての兵庫県立明石城公園、歴史(郷土)学習フィールドとしての明石港周辺など、その他市内全域を対象地域として設定し、これにより図書館と地域をつなぐ「地元学」も推進する。※地元学とは、地域のことを自分たちで調べ記録し地域の良さを発信する市民参画の地域研究活動である。
(3) この制度の名称は、「市民による夢の図書館プロジェクト(以下、Dチーム)」とする。

2. 原則
(1) 本制度は、参加する者が自己実現を目指して学び、「くらす力」「生きる力」を発揮する場づくりであり、図書館と市民による協働プロジェクトであると位置付ける。
(2) Dチーム制度は登録者の自主的な参加が前提であり、給与、報酬、報償、交通費、食費、駐車場利用料(減免)などは基本的に支給しない。
(3) Dチーム活動は自主的なものであり、特定の義務は生じないが、活動にあたっては社会通念上必要とされる義務と責任を負う。
(4) 登録者が自己学習を深めるために図書館主催の事業に参加する場合は、事業内容に応じた義務と責任を負う。

3. 参加資格
(1) あかし市民図書館の基本理念を理解し、ともに活動しようという意欲を持っている人。
(2) 満18歳未満の者については、保護者の同意を必要とする。

4. 特典
（1） 参加者は、所定の登録手続きを経てライブラリー・パートナー（以下登録者とする）になる。活動に際しては図書館が発行する名札を着用することで、図書館内での活動が可能となる。
（2） 登録者は、「Dチームミーティング」「Dチームカフェ」等のDチーム交流会に参加できる。
（3） 登録者は、自主的な活動を計画し実施することができる。
（4） 「Dチーム見える化プロジェクト」に加入したメンバーは、Dチーム制度についての提言を行うことができる。その他登録者もDチーム交流会において制度についての意見を出すことができる。

5. 手続き
(1) 登録を希望する者は、図書館が定期的に開催するDチームワークショップまたは、登録講座の受講を申し込む。
(2) ワークショップあるいは講座の終了後、登録希望の意志に変更のない者は、活動に必要な連絡先と個人情報を提供する。
(3) 登録者は、登録後の活動の安全を保障するため当該年度のボランティア保険に加入を必要とする。基本的には当館で登録手続きを行う（すでに他の団体組織等で保険に加入済の場合、登録の際に申告することで登録申請がなされたものとみなす）。
(4) 申請者の認証は館長が行う。
(5) 図書館は登録者に名札を交付する。
(6) 登録者の他に短期登録者がある。短期登録者はDチームワークショップまたは、登録講座を受講していない者で、Dチーム登録講座に相当する講座を修了した者を指す。特定の図書館事業に携わり、当該事業が行われる特定の期間のみ参加が可能である。年度を通じて参加するにはワークショップまたは登録講座を受講する必要がある。
(7) 上記の他、館長が認める者は登録の申請を行うことができる。(登録講座の受講免除)
(8) 登録手続きは活動者個人にかかわるものであるので、登録希望者が加入する団体が、登録希望者にかわって登録手続きを代行することはできない。

6. 登録の更新
(1) 登録期間は年度内とし、継続して登録する場合は毎年4月1日に更新する。更新の回数には制限を設けない。
(2) 更新時の登録認定は館長が行う。
(3) 更新をしない場合は中断扱いとし、中断した者が再度登録を希望する場合、再登録の手続きをとらなくてはならない。この場合はDチーム登録講座を再受講する必要はない。
(登録講座の受講免除)

7. 取り消し
(1) 登録者は登録の取り消しを申請することができる。
(2) 図書館では来館者を迎える立場になるため、社会通念の範囲で失礼のないように心がけすることが大切である。Dチームとしてふさわしくない言動や行動があった場合には、館長は当該者の登録を取り消しすることができる。
(3) 登録後、１年間（通常は年度末までに）活動が認められない場合は登録が取り消される。次年度に継続しての更新は行えない（何らかの事情があり活動が困難な場合は事前に相談すること）。

8. 手続
(1) Dチーム活動は、図書館事業への参加と、登録者の自主的な計画に基づく活動からなる。図書館は登録者に対して図書館事業の概要を公開する。
(2) できるだけ多くの方と交流し活動するきっかけをつかめるよう、基本的にグループ制をとる。登録者は、自ら団体（グループの方が良いような・・・団体に統一するなら〈団体制〉をとるになるかと。）を立ち上げるか、既存の団体に参加し活動する。
(3) 登録後、すぐに何らかの活動を行う義務が生じることはない。既存の団体活動に参加することが可能であり、また複数の団体で活動することもできる。ただし、年度末までに何らか活動を開始しない場合登録が取り消される。
(4) 登録者の自主的な活動の実施にあたっては、団体代表者が活動内容を記した「Dチーム団体結成申請書」を交流担当者に提出する。

(5) 登録者が自主的な活動を開始する際には、1名以上の交流担当者がサポートする。
(6) 担当者や団体の名称が変更になった場合、および活動内容が変更になった場合、代表者は団体変更申請書を交流担当者に提出する。
(7) 団体を解散する場合は、代表者は「Dチーム団体解散申請書」を交流担当者に提出する。
(8) 「Dチーム団体結成(変更、解散)申請書」が提出された場合、交流担当者は館長の決裁をもって処理する。

9. 事故
(1) Dチーム活動中に、登録者本人に生じた事故については、原則として自己責任とする。
(2) 活動中に起きたその他の事故については、当該団体代表者と図書館で協議の上処理する。
(3) 活動は個人のボランティア保険の加入を前提とし、事故が起こったときはその範囲で保証される。

10. ボランティア保険
(1) 交流担当者は、Dチームワークショップおよび登録講座終了時、活動を継続する者の登録更新時に、ボランティア保険加入手続きを代行する。

11.運営体制
(1)制度全体の運営事務は、あかし市民図書館Dチーム交流担当者が行う。
(2)登録者による自主的活動については、Dチーム団体で代表者を決め、交流担当者とともに運営にあたる。
(3)当該年度に1回、代表者会議またはDチーム見える化プロジェクトメンバーによる会議を開催し、次年度全体の日程などをきめる。
(4)交流担当者は、次年度年間活動予定を代表者会議等で報告する。

12.その他
(1)この運用要項に定めるもののほか、必要な事項は館長がこれを定める。

13.付則
本要項は令和4年4月1日をもって実施する。
本要項は令和5年4月1日をもって改訂する。
本要項は令和6年4月1日をもって実施する。

謝辞

本書の編集・制作にあたり、Dチームの皆様に多大なご協力をいただきました。
あらためて、2026年6月現在、当館で活動するグループを以下に記します。
（五十音順、敬称略）

あかしなお茶会
明石市立図書館おはなしの会
アートナビゲーターTetoMeto
あんさんぶるNami
abcあかしBOOK倶楽部
NPO法人明石おやこ劇場
絵本とおはなしの会“たんぽぽ”
絵本ばたけ
絵本を楽しむ会
おてつだいチーム
おはなしグランマ
きくちゃん・こっちゃん
NPO法人技術者集団ACT135明石
神戸郵趣会
声のかけ橋
コープ朗読ボランティアサークル
笙の会 あ組
デザインコマを作ろう！
パイオニアチーム
はとの会
はぴごら
ひよこの会
ふうせん畑
ボイス
ボランティアてづくり
本の修理屋さん
友愛朗読107
朗読にあこがれて
朗読グループ「いつか」
朗読グループ「えん」
朗読ユニットポプリ
山岡朗読会

奥付

著者一覧（五十音順、敬称略）
金谷奈津美
木原明美
佐伯理恵
澁谷千尋
澁谷美月
瀬尾真理子
髙島信之
髙橋博子
田中範子
田中梨枝子
友久誠司
中脇健児
姫路礼子
益山かおり
松谷淳子
由井清美

発行日：令和8(2026)年6月10日
発行者：明石市立図書館
［指定管理者　株式会社図書館流通センター］
企画・編集：Dチーム見える化プロジェクト・明石市立図書館

